

津田昇平教話 第三十話

令和三年一月三十日 朝の教話

金光大神の姿に目をつけないように
せよ。金光大神の衣服や形におかげ
はない。金光大神の御霊の働きにお
かげがあるのである。

おはようございます。

令和三年一月三十日、朝をお迎えいたしました。

ここ数日は、神様と金光大神様と氏子の間柄について、神様の御裁伝ごさいでんを中心にしながら、お話をしてまいりました。

その中で金光教が、取次とりつぎの道であると、それが金光教たる所以ゆえんなんですけれども、金光大神取次いんこうだいじんとりつぎ、その省略ちりつぎがお取次とりつぎになるんですけれども、この金光大神様がなされるその取次とりつぎというものがあって、神様が世に出てきた。氏子もおかげを頂くことができた。だから、両方の恩人はこの方、金光大神である。ということをし、神様が仰せになられるわけですね。そし

てそれは教祖生神金光大神様をはじめとして、万国まで残りなく金光大神でき、おかげ知らせいたしてやる。という御裁伝ごさいでんに向かっていくわけですけれども、このお取次とりつぎ、金光大神というそのお役ですね、役柄について私が教典の中で一番大事や思っているみ教えというのがありましてね。残念ながらこれまでの、金光教の中でこのみ教えがそこまで注目されることはなかったように思うんですけども、でもそれは、あまりよく理解できてなかったんじゃないかと私は勝手に思っているんですけども。でも一番大事なのは本質のここやなあとは思っているところがありますね。

それは仁科松太郎にしかまつたろうの伝えというところがありました、

金光大神の姿に目をつけないようにせよ。金光大神の衣服や形におかげはない。金光大神の御霊みたまの働きにおかげがあるのである。

【理Ⅱ 仁科松太郎 一】

もう一度言しましょう。

金光大神の姿に目をつけないようにせよ。金光大神の衣服や形におかげはない。金光大神の御霊みたまの働きにおかげがあるのである。

という、ご理解があるんですね。

私の中ではもうこれが一番大事やとさえ思ってるぐらいなんです。

肝心要は、これはまあ、教祖様が自分自身のことを仰ってる。教祖様は自分だけのことやなくて、ここから広がっていく、万国まで残りなくてできていく金光大神取次者とりつぎしやというものも、結局は同じことだと、仰るわけですよ。

人間というのは天から御霊みたま、地から肉体を分けて頂いております。分け御霊みたまとたましいのと言いますね。分け肉体ですよ。肉体分けて頂いていますから。この肉体というものと、御霊みたまというものと、それぞれ天と地から分けて頂いてますので、この大天地だいてんちから分けて頂いているの

で、小天地こてんちと言ったりしますね。教祖様はそのように仰ってますね。
小天地こてんちというのは天と地で成り立っているわけですが、人間のことを私の体やったら肉体は目に見えるところですけれども、肉体を命あるものとして、命を命たらしめている働きが御霊みたまの働きになります。御霊みたまが抜けたら、電池が抜けたようなもんで全く動きようがないでしょうし、ただ朽ちていくだけでしょうね。そこにこう御霊みたまが宿って、働いて、御霊みたまが働くからこそ肉体という器が動くことができるわけですね。

金光大神の姿に目をつけないようにせよ。金光大神の衣服や形におかげはない。つまり、もう肉体の存在が中心ではないということをこう仰ってるんですね。

金光大神の御霊みたまの働きのおかげがある。やっぱり御霊みたまなんです。分けわ御霊みたまなんですよ。これ教祖様でも教祖様の分けわ御霊みたま様だし、二代様でも三代様でも四代様でも五代様でも、その分けわ御霊みたま様だし、大阪教会のしらかみしんいち白神新一郎先生でも、難波教会のこんとうふじもり近藤藤守先生でも、芸備教会のさとうのりお佐藤範雄先生でも、甘木教会のやすたけまつたろう安武松太郎先生でも、玉水教会のゆかわやすたろう湯川安太郎先生でも、その方々の肉体、姿、形、衣服のおかげがあるわけじゃなくって、彼らの神様から分け頂いている、その分けわ御霊みたまの働きのおかげがあったんですね。

考えてみて下さいね。その教祖様でもそうなんですけれども、御霊みたまの位ゐ位ゐというものがやっぱりありますね。肉体というのは、あの普通の名

前ですよ。ただのね。三代金光様ゆったらね、本当にただの攝胤様せつたねって
いうお話なんです。教祖様だって赤沢文治あかさわぶんじですしね。これが名前ですよ
ね。肉体のね。

でも、金光大神というふうにして、御神号ごしんごうを頂かれるというごことは、肉
体がなんか凄くね、進化して、こうムキムキになって、マッチョになっ
て、ものすごい跳躍へんりゅうできて、肉体が進化してね。目が三つも四つも見え
るようになったりとかね。手が五本も六本も出てきてとか、切っても手
が生えてくるとかね。そういうふうにして肉体が進化して御神号ごしんごうを頂
たわけじゃないんです。肉体は何も変わらない。むしろ歳を取れば取る
ほど、弱っていきますし、できることもできなくなっていくんです。

じゃ、何をもって金光大神になられたかと言いましたら、結局それは、御霊みたまの働きなんですね。神様から分けて頂いている肉体ではなくって、その分け御霊みたまと言うもの、たましいと言うものを磨いて磨いて磨いで、く中で、そうして御霊みたまの位が高くなっていった。光を放つことができ、そうして、生きている間に神になるわけですよ。神の働きを表すということができるようになってくるんです。

だから、死んだら、死ぬと言うのは肉体とたましいが別れて肉体は土に帰る、御霊みたまは生き通してなるわけでしょ？ こう生きて死んでからでも神様のお役に立とうと思ったらこれは御霊みたまの働きがあるからなんです。御霊みたまの働きのおかげがあるから、死んでも働けるんです。残念なが

ら肉体はないですけどもね。じゃ、御霊みたまが全てかと言うとそう単純でもないです。昨日までの話をしたときに、神様がなんで教祖様に託たくされたか言ったら、あの人が生きてるからなんですよ。生きてると言うことは

□耳があるわけでしょ？ □耳があって姿がある。藤守先生ふじもりの言葉で言うたら、的があるんですよ。的なしの信心は難しいけど、私には教祖様金光大神様という的があったから信心がしやすかったと仰おぼってる。そういうことなんですよね。生きてないと取次とりつぎはできないんです。だからどんなに偉大な先人の方でも、亡なくなられてからは、取次とりつぎはしてません。当たり前前の話です。だって肉体がないとできないんですから。教祖様であれそんなこと一言も残のこしてないし、神様もそんなこと一言も残のこしてな

い。だってできないですもん。

生きてるから神様は教祖様に取次とりつきして助けてやってくれて仰っただけだね。それは氏子の話を直接耳で聴いて、そして神様の話を氏子に話して聞かすことができる。それが取次とりつきで、それは肉体がないとできないんです。だから姿、形もやっぱり大事なんですよ。

でないと取次とりつきはできません。それでいながら、いよいよのところは、どんなにその口と耳があってもね、別に私だってありますよ、でもこの口やないといかんのかと言ったら別にそうでもないです。いや他になんか喋しゃべるものがあんなやったら取り替えてくれたら、別にそれでも構まやしません。耳も別にこの耳じゃなくても構まいやしません。あのどなたかの

違う耳と交換してもそれは構いません。そこは大した問題じゃないです。

おそらく教祖様でもそうでしょうね。別に教祖様は赤沢文治さんあかさわぶんじのこ

の口があって目があって耳があって、別にそれじゃなくてもいいと思いますよ。それこそ今の技術やったらね、口取って誰かと付け替えることくらい、やろうと思ったらできるかもしれない。耳だってそうかもしれない。目だってひょっとしたらできるかもしれない。取り替えたとしても、別にそれは問題じゃないんですよ。御みたま霊さえ変わってなければね。

これは大事なのは、肉体が大事なのは、生きてて聴くことができてる、話すことができると言うことが、そこが肝心要なんです。

だから、それができると言うことのために、生きてるものにしか託す^{たく}ことはできないから、天地金乃神様は生きてる人間である一人の氏子に、それを託されたんですよ。

そして、信心を育て上げて、叩き上げて、金光大神ができて、多分がない一人のね、めぐり深い難儀な氏子が信心して叩き上げて育っていつて、金光大神ができる。

できて、そしてその金光大神が生きてると言うことが大事で、生きてると言うたら、耳、口があるということ。この口、耳があって姿があって、氏子の的にもなれて、話して聞かしてやることができ、ここが肝心要ですね。でも、何度も言います。それがあったとしても、別にこの耳

じゃないと、この目じゃないと、この顔じゃないといかんと言うわけじゃないです。別にあの、付け替えて、違う人を取っ替えてもらっても構いませんわね。

家族は困るかもしれませんが、「誰やあんた？」ってなるかもしれませんがけどね。御用することだけを、単純に考えたら別に私の顔なんてどんな顔でもええですよ。目が二つでなくても、一個でも三つでも構やしません。耳だって一つであってもいいんかもしれませんが。ちゃんと氏子のお話を聴けて、ちゃんと話せたらそれで結構ですよ。口も一個で結構。二個も三個もあってあちこちべらべら喋っても困りますけど。一個あったら充分でしょう。でもこれ、肉体があって、生きてないとこれできな

いんです。

これは、道具です。肉体はね。いよいよのところは。でも、肉体があるから信心ができるし、信心があるからたましいを磨くことができるんです。肉体が無かったら信心を磨く、たましいを磨くことはできません。

肉体があるから信心できるんです。やっぱり、これ肉体は大事ですね。大事なんです。って言いながら肉体を鍛えて、何回も言いますが、ハチノスハシロキ跳躍力を上げるとか速くなるということが信心じゃなくって、肉体を使って、神様からね、与えて頂いてるこの肉体、分け肉体を使って、これ貸したるから、これ使って、そして信心しなさい。そしてたましいを磨

きなさい。

ピアノしてる人にはピアノ買い与えんとできんでしよう。習字したい人には、筆と墨と硯とを渡してあげんとできんでしよう。野球したかったら、グローブとバットを渡してあげんとできんでしよう。

信心は？ 肉体を与えてあげんとできんのですよ。だから肉体は与えて下さってます。その与えて頂いた肉体を使って、信心する。それだけっちゃ、それだけかもしれない。でも神様から分け与えて頂いているものですから、大事にしたいもんですね。

どうせ死ぬときお返しするにしたらって、丁寧によく使ってくれたなあと言ってもらえるように、時間がたって長く使ったら、そろ、どんなも

んでもね、古くなって弱ってきて、あちこちそろガタもくるでしょうね。
私もこの、まだ若いっちゃまあ若いんですけれども、それでももう、五
十の近くなってきたなあと思ったら、だいぶ若い時みたいになっちゃうわ
けにはいきませんもんね。

でも、それでも、いつかお国替くにがえる時には、「ああ、大変お世話にな
りました。ありがとうございます」と言ってお礼申し上げて、ほんで、
神様にお供えしてもろうてね、ほんで、お土地に返してもらいたいもん
です。お世話になりましたからね。これ無かったらもう、あの信心もな
にもできやしませんからね。

でも、それを使って、信心もできるし、取次とりつぎする者やったらお取次とりつぎもで

きるんです。

でも、いよいよ大事なところはこの肉体を鍛えまくるんじゃないなくて、たましいを磨いて鍛えまくっていくわけです。そして光を放つ。そして、だんだんとうとう、神に近づいて行くということ、そこが大事になってくるんですね。ちなみに、

生きとる時に神になりおかずして、死んで神になれるか。

【理 I 島村八太郎 十】

しまむらはちたろう

「なれるか」って言う、教えがありますね。島村八太郎さんという方のお伝えで、有名なんですけれども、生きてる間に、神様から肉体と分け御霊みたまを与えて頂いて生きてるわけですけれども、死ぬと言うことは、肉体という服を脱ぐんやと思っというて下さい。肉体は衣服やと思ってもらっても結構です。これ例えですけどね、それ位、脱いだら何ができないかいうたら、本体であるたましいが出てくる。たましいは生き通しなんです。生きてる間に神になってないのに死んで肉体という服抜いでる時に、「はい、あんた神様やで。」とか言ったらそうは行きません。そんなんありえないですよ。死んだら御霊みたまの神様みたいな感じになってますけど、御霊みたまの神様って言える人は、生きてる間に徳を積んで神になってる

人だけの話です。

和太^{かずた}先生、慎治^{しんじ}先生、由幾^{ゆき}先生、たまの先生、人を助けるために神様の御用に立って神様を現して、それだけの徳を頂いて、力を頂いて、そして、生きてる間に神になってる。そういう人は、肉体という服を脱いで、御^み霊^{たま}がもう神なんですから、それは御^み霊^{たま}の神ですよ。

じゃあ、生きてる間に神になってるかどうかってどうやって分かるんですかって、たまに聞かれたことありますけど、いろんな先生方から。そんな簡単や。氏子が拜んでくれるかどうか見たらすぐ分かるわ。氏子はもう、すぐ分かってるでって。教師やから皆拜むんじゃない。この先生に助けてもろうたなあ。この先生が現して下さる神様によって自分

は助けてもらった。と思うたら、勝手に拝み始めるから。拜んできたときには、自分の命というものを、出口にして、パイプの出口ですよ。蛇口のホースです。そこから神様が現れて、ホースから私やったたら私という命のホースからね、出てきた神様に、この人は助けられたんやな言うことです。あくまで私と神様とのパイプがあつてね、それがしっかりしてなかつたら蛇口からいくらホースがあつてもね、出てこないですよ。神様の方からもそら、蛇口ひねったらね、そら、ばーっとこう出てくるでしょ？ 私という、ここは姿、形ありますけど、でも私の命から現れる神様のお徳、力、それを皆さん頂いて、おかげを頂くわけですね。教祖様にしても、教祖様の肉体というものがあつて、分け御霊様わみたまがあつてとり

わけ、御みたま霊たまですよね。御みたま霊たまの働はたらきがああって、天地金乃神様のお徳が、教祖様という赤沢文治さんあかさわぶんじというひとりの人間の男性のいのちを通じて、立ち現れていくんです。放出されていく。その神様に皆、救われて行ったんですね。だから、人によって違うんです。この広前ひろまえに行っても助かる。この広前ひろまえに行ったらどうもおおかげは頂かんということは、やっぱり昔からあったんですよ。教祖様のご理解ですけど、

神は一体じゃによって、此方の広前へ参ったからというて、別に違うところはない。あそこではおかげを受けたけれど、ここではおかげが受けられぬというのは、守り

守りの力によって神のひれいが違うのぞ。

【理Ⅲ 金光教祖御理解 九十二】

書いてますね。噛み砕いて言いましたらね、神様はもう一緒やと、一緒やと。だからここだろがどこだろが、参るのは一緒や。拜む相手は神様なんやから。ところがそりゃまあ拜む相手は神様や全部一緒やから、違うことはないと仰ってる。別に違うところはない。でも、あそこではおかげを頂いた。こっちではおかげは頂かれないということはやっぱりある。おんなじ神様拜んでんのになんで？ 当たり前ですよ。これ。

守り^も守り^もの力に、守り^も守り^も守り^もって、守り^もってというのは、守^もるとい^もう、広^{ひろ}前^{まえ}

の守りというか、番人のことですね。つまりそれは、広前ひろまえの守りというのは、金光大神取次者こんこうだいじんとりじきしやのことを言いますけれども。教祖きょうそ広前ひろまえやったら教祖きょうそやし、難波なんば教会の初代先生はつだいせんせいやったら藤守先生ふじもりせんせいでしょうし、大阪教会おさかきょうかいやったら白神新一郎先生しらかみしんいちろうせんせいやろうし、玉水教会たまみずきょうかいやったら湯川安太郎先生ゆかわやすたろうせんせいやし、阿倍野教会あべのきょうかいやったら伊藤コウ先生いとうこうせんせいやろうし、それぞれの先生方がおられて、その守りが、その方、ここやったら私ですね、今。その守り守りの力、守りの持つ力によって、徳と力によって、神様の力、現れ方は違ってくるということですね。これは、当たり前ですわね。つまり、私がここに座っとるのんと、違う方がこの尼崎教会で御用して、守りになってるのんとでは、これはやっぱり違うわけです。おんなじお広前ひろまえでも、おん

なじ建物でも、お結界けっかいでも、それは場所は一緒でも、その御霊みたまが違うわけですね。

肉体は別に大して問題じゃないと思います。私の肉体と誰か違う人の肉体と取っ替えして、私が例えばね、山田太郎さんという人の体を借りて私今ここで喋っててもそりゃ一緒やと思いますよ。

みたま御霊の働きが変わらるのであればね。大事なのはどれだけ御霊を、たましいを磨いて、そして、この肉体を使うて、神様とのパイプを私が、守りがきちんと繋いで、そして、参ってくる氏子てんちかねのかみにその天地金乃神様の徳と力を現せるかなんです。その現した天地金乃神様てんちかねのかみによって、皆おかげを頂くんです。自分がただ神様に拜んでおかげを頂くとこのんは、そ

れができりゃいいんですけど、だいたいそんなことができるのは、単純には思わないです。だんだん独り立ちして行ってもらって、拜んでもらって助かるんじゃないかってね、自分で信心して、おかげを頂いてもらわんといけません。だから、自分と神様のパイプを繋いで深くしていくのが、信心の稽古けいこですね。ピアノを習うんでもそう。いつも先生が横にいてこうやって指でやってくれとかね、お習字でも最初わからんからって、ずっと上から手を持ってもらって、ばーっと書くっていう、そうじゃなくて、自分でも教えて頂いたことを自分の中で、手本を見ながら心の中で見ながら意識しながら、わが身わが一家を練習帳にして、お稽古けいこをして、だんだんできるようになってくる。書けるようになる。踊れる

よくなる。おなじように、信心も教えて頂いたことを大事にして段々とできるようになってくる。

これが大事なんですよ。だから、自分は自分なりに求めて行って、神様からおかげを頂けるような信心をしていく。こりゃ大事ですね。でも、一方で道と言うものは、これもう教えてもろうたからあとは全部できるわっちゅうもんでもなくてね。よく人間国宝の人なんかで昔なんかテレビで見たことありましたけど、祇園ぎおんかなんかどっかのね、人間国宝で、なんか踊ってらっしゃった方でしたよ。もうお弟子さんと、もうお弟子さん言うてももう六十代七十代そんな方だね。もうその方自体もご高齢でもう九十歳くらいやったかな。そんな感じでしたよ。人間国宝だね。

でもね、もうお弟子さん言いましても、もうどこぞのその師範しはんやらなんかそんな方ばかりですよ。でも、来られて、やっぱり教えてもらう、師匠に教えてもらうとか。でもう自分自身も師匠が死ぬまでずっと教えてもらってきた。でもう自分は人間国宝になって、師匠はみんな亡くなった。亡くなったけれども教えて頂いたことを見ながら、意識しながら死ぬまで稽古けいこして磨いていく。そうなんでしょうね。結局、師匠が死んでも、その人の中で生き続けて、その教えて頂いた御取次おんとりつぎ、み教えというものが、ずうっと自分のなかで手本として生き続けて、意識して、教えて頂いたことを、大事にしながら死ぬまで、わが身わが一家を練習帳にして信心の稽古けいこに励んで、そして、たましいを磨いていくということ。こ

れが結局、信心でいう「道」なんでしょね。道はどんな御道もそれは、花の道だろうがね、なんの道でもあると思いますよ。お茶でもそうでしょうしね。なんでも道と名のつくものにはあるとは思いますが。でも、終わりがないですよね。死ぬまで変わりやしません。そして、守りというのは、守り守りの力というのは、御霊みたまを磨いて磨いて、磨けるところまで磨いて。そういう金光大神という、それぞれの広前ひろまえの金光大神という役柄を神様から仰せつかって、したいからしたくないからとは単純に言えますよね。三代金光様見ててもね。三代金光様のことはまたいつかご紹介しますけど。まあ辛かろうが苦しかろうが関係なしに、与えられたお役というものを全うするよりほかありません。

その頂いた役柄に、取り組まして頂く中で、人を助け、そしてまた、我が身が立ち行く。神様の御用に立たしてもらおう。そう言う、定めなんですよ。きつとね、皆。

だから、それはそれでいいんだけどもやっぱり、たましいを磨いて磨いて磨いた、人の徳と力というのは、おんなじ皆、どの先生も、徳と力は神様の徳です。神様の力なんですけれども、それを引き出して自分の命を出口にして、この参ってくる氏子に放出するというのは、結局はそれは、守り守りの力なんです。守りの持つ力になってくるんですよ。

ここをよう、わからしてもらわんといかなあと思います。じゃあ、

難波教会で参って、ふじもろ藤守先生におかげ頂いたゆうのんは結局、ふじもろ藤守先生

の現す天地金乃神様のお徳と力で助けられてるといことなんです。基
本的にね。

その力があって、天地金乃神様と自分とが段々と繋がってきた。信心
のお稽古けいこをしてね。うん。でも藤守先生ふじもりがたとえ死んだとしても、その人
は藤守先生ふじもりの教えを守ってその中で、自分と神様と藤守先生ふじもりという、そ
の中でね、大事にしていかれるでしょうね。もちろん次の代の先生がい
らっしゃったら、その先生を通じてまた教えて頂いて結構なんですけど
ね。

でもそうやって教えて頂いたことが自分の中に残って、そして神様と
のパイプが繋がりが信心が成長して行く。これが基本ですわね。それはそ

れで大事。でもやっぱりね、昨日も言いました。自分と神様だけの流れ
というのんと、金光大神様だけの流れというのんと、神様金光大神様と
いうその両方の流れを汲むんであったらおかげの頂ぎが違えますんでね。
天地金乃神様を頼んだらええって教祖様は仰る。でも、神様は、金光大神
てんちかねのかみ
と言えはそれでいいって。私はもう両方使ったらええって。どっちの方
も、両方のルートの方が絶対得や。AプランBプランじゃない、Cプラ
ンがええ。AもBも、兼ねてる方がええ。神様金光大神様言つてたらそ
の方が絶対得やと思うし。も一つ言つたらね、神様金光大神様、おまけ
にね、御霊みたまの神様てくっついとつたらそれは鬼に金棒やと思いますよ。
尼崎教会やったら、和太先生かずた、慎治先生しんじ、たまの先生すがって縋すがつといたらそ

りゃいいですし、それぞれのお教会で信心なさってる方であれば、自分
のご縁頂いて、助けて頂いた先生であったり、あるいは一方的にでもお
慕いしている御霊みたまの神様がいらっしゃったら、せっかく徳を積んであの
世に行ってらっしゃるんですからね、これはね使わんのは勿体ないです
よ。使えば使うほどね、御霊みたまの神様は喜ばれるんですから。使って下さ
るのを待ってるんですからね。一方的でいいんです。

いや私はあの金光教どこどこ教会の初代の先生の御本を縁あって読ま
せてもらってありがたくって、勝手にね、ファンになって御霊前これいせんでご祈
念してるんです。ってええことですよ。もう、勝手にしたらいいです。そ
したらね、その先生は勝手にとは思わずに、知らんやつなんて思わない

ですよ。

当たり前ですよ。そら自分のお話やら神様の話を喜んで聞いてくる氏はね、御みたま霊様だって可愛くてしようがないですよ。だからね、守ろうとしようとしてくれるんです。

生きてる間に信心して積んできた徳をね、これ使うてくれ使うてくれ仰るんですよ。だからね、勝手にでいいんですよ。六条院教会の金照明こんしやうみやう神様じんでもいいし、双岩ふたいわの大先生でもいいし。

どこだっつかまいやしませんよ。この先生せんせい〜と思って。畑徳三郎先生はたたくねさぶろうでもかまいやしません。

ああ、この先生は大事ななあと思うたら、その先生に亡くなってもね、

御霊前ごたいぜんで勝手にお縋りすがしてたらいいんですよ。そしたらその先生のお徳を頂けますから。これ大事なことです。生きている神様、金光大神様も大事やし、でも亡くなった、せっかくね、積んで生きてる間に「ご修行して、生きてる間に神になって、亡くなくても御用に立たしてもらおうぐらいの気持ちきがいの気概きがいでいらっしやった先生方のお徳は使わない手はないですよ。使ったらいいんです。使ってもらった方が嬉しいんです。うん、そうなんです。使ってもらってなんぼなんです。そのためにあの世に行ったのね。

生きてる者がしっかり使わなかったら、もう本当に残念ですよ。宝の持ち腐れですよ、あの世で。あの世に持っていった徳なんてね、使って

もらってなんぼなんですよ、生きてる人間に。あの世でもらって自分たちが安穩あんのんとするために持ってったんちゃうんですから。生きてる人間が助かるためにあの世に持ってっててるんですよ。でもそれ生きてる人間が信心して引き出さんかったら使いようがないですよ。だからね、いいんです。もう、どんな人でも関係ないですよ。いや、ほんまですよ。私こゝに崎教会で御用してますけどね、話逸それてばかりやけど。違う教会の人やろうが、違う宗教の人が参ってきて、皆可愛いんですよ。で一方的に「また参らしてください」「ああそうか」で、どこの人なんていちいち考えてません。全教ぜんきょう一家いっかですよ。

三代金光様はね、どこの広前ひろまへだって皆家族でね、全教ぜんきょう一家いっかと仰せられ

た)。可愛いもんですよ。

だからね、神様もそうやし、教祖様もそうやし、歴代金光様もそうやし。もう皆さん亡くなっておられて、御霊みたまの神様ですよ。しっかりお継すがりしたらいいんです。ただ、肉体はないですからね。喋ってはくれまへんわ。それやって喋ってくれてなんでもお知らせ聞けるってバンバン聞けるんやったら、結構ですけど、そう単純じゃないでしょ。だからそれは、生きた人間でなければ取次とりつぎはできません。口耳がないと話になりません。話も聞いてもらえんし、話だって喋ってもらえんし。それは生きてる人間じゃないとあきませんからな。生きてる人間は、こりゃもうこの広前ひろまへかによって全然違いますわ。それは守り守りの力ですからね。

守り守りの力というのは生きてる人間の、たましいの、御霊みたまの働きなんです。これはやっぱり大事ですよ。そういったことですね、ほんとうによう、お互いによろわからして頂いて信心も意識もさせてもらいたいもんです。

三代金光様の有名なお言葉がありましたね。三代金光様すごく言葉が少なかったんですよ。どこの教会やったかちょっと忘れたんやけど、東京のほうで、布教に行かれるっていうのですね、その当時二十七歳やっただかな、若い教師がね、教会に養子に入ったやっただかな。教会長になると、いきなりね。どっかの教会の先生亡くなったんでしよう。そこで自分はその教会の後継に入って、いきなり教会長の御用さしてもらおう。で

もそれまでお取次とりつぎもしたことがなかったとか。そういうことやったらしい。「お結界けっかいの奉仕ほうしに着きくにあたって守まもるべき心構こころかまえを、どうぞ教えて頂たまけますように」というふうにして、三代金光様さんだいきんこうさまに御書おんがき下くだげを頂たまきたいと、お言葉頂たまきたいって。そしたらね、三代金光様さんだいきんこうさまは、書いて下くださったっていうんですよね。そこにはね、何なにて書いてたかっていうと、ちょっと読んでみましよう。

「末すえは生き神かみにならして頂たまこうという心こころでお仕つかえなさればよろしい。

明治四十四年七月五日金光攝胤きんこうしやくいん」と書いてお下くだげ下くださったんですよね。

「末は生き神にならして頂こうという心でお仕えなさればよろしい」

「生き神になる」と、三代様は生き神に、もう生き神様と言われてらっしゃいましたからね。ご神号しんごうなんて、別にこう、昔の時代みたいな感じで、教祖様も、どんどん勝手にね、自分はおあやこうや言う者も出てきたんで、いったん止められましたけど。

でも、普通に考えたら三代金光様だって、ご神号しんごう頂いて当然だけの徳を、徳の位を持ってらっしゃったわけですが。

その三代金光様が、新しくね、布教に行く、新しく、ここで布教に行くという方に対して、若い教師に対して、どういう心でお結界けっかいに座って、

お取次とりつぎさせてもらったらたらいいのんか、その心がない、それが「生き神かみにならせて頂たまこう」「すぐとは仰おほってません。今とは言いいませんもんね。

「末は」って仰おほいますから。

「いつか、生き神かみにならして頂たまこうという心でお仕つかえなさればよろしい。」と仰おほった。

これ、素直すじに頂たまいたらね、取次とりつぎによって、生き神かみですからね、神かみが生まれるということなんです。取次とりつぎによって、こう神かみ様が、天地金乃神てんちかねのかみ様が生まれるような、神かみ様が、天地金乃神てんちかねのかみ様が、その先生せんせいを通じて現あられるような、「そんな広前ひろまへになりなさい。ならしてもらいなさいよ」と、言うことを、こう仰おほってるわけでしょう。

取次とりつきによって、天地金乃神てんちかねのかみ様を生んで、現れて、そして、氏子うぢこがその神様のお力で、お徳で救い助けて頂くような、それができるような、現すような、そういう広前ひろまえにならしてもらいなさいと、末で。と言うことですね。

神様を現すっていうのは、やっぱり、徳と力が必要になってくるんですね。これは三代様、また三代様になりますけどね、本当に寡黙かもくな方で、ようお聞きしました。私はもう、直接お会いしたことはないですけど、五代様とお取次とりつき頂いても三代様のお話が出て来ましたし、老先生は三代金光様大好きですね。三代金光様の色紙をちょっと私、見たことがあるんですよ。そこにね、金光様と奥様のキクヨ姫様とね、一緒にこ

う、書かれた書よしがあったんですよ。これは金光図書館で見たのかな。そこにはね、色紙に何て書いてたかいうたら、三代金光様が、ご晩年ばんねんやっただと思う。一言だけね、「徳と力」って書いてあったんですよ。

「徳と力」ですよ。たったそれだけ。三代金光様が、「徳と力」って書いておられてね。そんなでもうご晩年のお写真が横に掛かってあってね。もう、ほわあーって思いましたよ。

それ、「徳と力」っていうのは、「天地金乃神てんちかねのかみ様の徳」であり、「天地金乃神てんちかねのかみ様の力」なんです。これは間違いないんですよ。神徳しんとくとかいうのはそういうことなんです。でも、その「天地金乃神てんちかねのかみ様の徳と力」を、現すことができる、そういう人が、「徳と力を持ってる」っていうわけです。

実際の「徳と力」というのは、てんちかぬのかみ天地金乃神様のなんですけども、それを現すだけの力がある。それを、「この人は『徳と力』を持ってる。」と云うんですね。それを昔から御道では、徳者と言ったり神徳家しんとくかと言ったりするんです。聞いたことないですかね。徳者。

徳者っていうのは、神様の徳を、現す者ですね。徳者。で、まあ神徳家っていうのもまあおなじでしょうね。神徳しんとく、神様の神徳を、頂いて現すことができるのを、これ神徳家と言ったりしますよね。いかにこれって色紙に書くぐらいですからね、三代金光様が、「徳と力」をどれだけこまあ、意識をなさって、大事になさっておられたかということが分かると思います。ですんで、まとめますけど、「神様の徳と力」というのは、

てんちかねのかみ

「天地金乃神様の神徳、徳とそのお力」であって、またそれを現すことができる者が備えた「徳と力」っていうことになるわけですね。ま、そういう、「徳と力」を、頂いて、ひろまえ広前に座ってですよ、守りをする者は、そうでないといけないですよね。

これね、教祖様やからいいとか、三代様やからいいとか、いやそういうことじゃないんですよ。そんなレベルじゃないんです。これはね、教師であり、またひろまえ広前に座って、神様と氏子の間を取次とりつぎぐ者はね、これ絶対持っとかんといかん物なんですよ。でないとお本当の意味で取次とりつぎなんてでないじゃないですか。金光様が持つてはんのやったらそれで良いわ、なんていや、そんな違いますよ。御道の教師、とりわけひろまえ広前の守りで

あればね、その「徳と力」を頂けるような信心を、やっぱりこう求めていかんとあかんのんです。で、「自分には無理やな」「もうそんなお徳だつてありません」「いや最初からあるもんでもないし。」「いや、自分にはもうそんなそんなとんでもないです」

とかね。いや、そやけど謙虚さで言ってるのんか知らんけど、それだのね、謙虚さを隠れ蓑みのにして逃げ口実くちじつにしてるだけです。卑怯ひきょうですよ。自分もまた広前ひろまえの守りとしてね、このお広前ひろまえを神様からお預かりしている立場であればね、これはね責任があるんですよ。誰に対して？ 神様に対して責任があるし、教祖様に対して責任があるんですよ。だから逃げたらあかんのんです。

そうやってね、何があってもね、神にならせて頂くんだって、末は生き神にならせて頂くという心、この進取しんしゆの気神きしんですよ。進取しんしゆってわかりますかね。

進んで自分からこう物事を進んで行こうと、取り組んで行こうっていう、待ってるんじゃない、自分から取りに行こう、進んで取るですよ。進取しんしゆのまあ、精神しんしゆとか、気風きふうとか、気性きせいとか、言いますでしょ。だからそういう進取しんしゆの気神きしんですよ。もう「末は生き神にならして頂くよ」という心でお仕えなされればよろしい」と、こう仰った。で、ここが大事なんですよ。ね。

だから、千六百か、ぐらいお広前ひろまへがあるんですかね。てことは、千六

百、もういらっしやらないところもあるかもしれないけど、でも本来であれば、sonだけ、教祖様が、生神いきがみ金光大神様こんこうだいじんとして、金光大神様をジエネレーターにして、発生装置になって、千六百、で、歴代で考えたら何千人もね、広前ひろまえの守りを、金光大神取次者こんこうだいじんとりつぎしやを作って下さっとるんですから。千六百も出社でやしろ作ってね。その中で、お広前ひろまえを預かってるんであればね、「自分にはできません」、「徳も力もありません」ふざけるなと思いませんよ。だったら教師やめえ、としか思いませんよ。死んだと思うて欲を離して、天地金乃神を助けてくれ。って、いう心で教祖様は受けて、それを、教師第一号が教祖様でね。その後を受けて御本部に行って、終生しゅうせい、道の御用にね、たらしめたまうことを願いまつるって誓って。

であれば、結界けっかいに座まって、広前ひろまえの守りとして、人を取次助とりつきけるとい
うお役を頂いて、教師って言ってもいろんなお役がありますからね。お
裏のお役だったりとか、それはあります。由幾ゆき先生だってお結界けっかいに座っ
たりされんかったと思いますよ。でもそれはいいんです。それぞれ頂い
ておりゃ。そやけど広前ひろまえの守りとして、御用ごようさして頂くというその役柄
を頂いたんであればね、それはやっぱりね、自分もね、こう末は生き神
にならせて頂くこと、神が生まれるような、天地金乃神様てんちかねのかみと徳と力が、自
分という命を捌はけ口くちにして、そこから参まゐってくる氏子うぢこに広がっていくよ
うな、吐き出せるような、立ち現れるような、靈験れいげんあらたかにね。そんな
るような、やっぱりおかげを頂けるために、守りは守りなりの、自分な

りの信心をやっぱり求めていかんといかん。

末で生神にならせて頂くんやという気概で、御用さして頂かんといかんなど、私は思つて来ましたし、また、そういう心で、御用さしてもらうのが教祖様、神様の願いで、それが足りんようになったからか、どうかまあわかりませんが、そんなこともあつてか、御道ね、だんだんおれてくるのは残念なことですけど。でもまあここからおかげを頂かんといかんと思いますよ。その気概きがいが大事です。気概きがいってわかります？ 困難なことがあつても乗り越えていこうって言うその意思ですよ。強い意志。それを気概きがいって言いますよね。だからまそら、金光大神になる言うたかてね、末は生き神にならせてもらう言つたかて、そら、「なりたい」

「はい。じゃ、どうぞ」なんていきませんわね。

結局は、その先生の人生の中でいろんな苦しい、辛い、悲しいことだ
って起こって当然なわけですけど、そこを信心して一人の氏子として信
心して、そして、おかげを頂いて、おかげを頂くだけの信心をさして頂
いて、自分の本心の玉を磨いて、たましいが光を放って。そうしてはじ
めて。御用したからっていうそんな単純だけじゃないですよね。

自分の身の上のことはもちろんのこと。でも、自分のことだけやなく
って、自分とは関係のない氏子のことまでも含めて、我がこととして、
信心を教えて、させて。辛抱しながらでもね、たとえ裏切られても裏切
られても、それでもまたおかげを授けようとし続けて。そうやって、参

ってくる氏子におかけを授けられるように。信心辛抱してね。裏切られても、それでもまた助けようとしていく。その中で神様が現れてくる。それだけのいのちになっていくんですよ。それだけね、神様の徳が、力が、現れるようになるためには、やっぱり信頼を結局されんといけませんわね。神徳っていうのは神様からの信頼というのは、これちょっと違いますよ。

これわかってない人が言ってるんです。神様からの信頼がないと、神徳は頂けないですよ。でも神徳っていうのは神様の信頼、いやこれ、なんにもね、わけ分かってない人がほんまに普通に言うてますけどね、全然ちやいますよ。それ聞いてるだけでもようわかってはらへんで、よう

わかります。神様からの信頼を頂いて神徳は頂くんです。自分と神様とのパイプが深くなって自分のいのちというものを、ホースの先になってね、そこから天地金乃神様の、徳と力が現れていくんです。それで、参って来た氏子が助かっていくんです。そうでないとはんとにね、世間になんぼうも難儀な氏子あり、取次とりつぎ助けてやってくれ、いうたかってできませんよ、そんなね。

だから、もうこの辺の話は、もう氏子に話をしているとというよりも、もう御道の全ての教師に話してるような気がしますけど。

私自身も含めてですけど、こうじゃないといかなあって、自分自身もまた死ぬまで私も求めて行って、死ぬまで修行させて頂いて、死んだ

時に、死ぬ瞬間が一番、道幅が広いように。一番自分のたましいが磨かれて、最高の状態でお国替えくにがさしてもらって、死んでからも皆さんのことを守れるような、そういうおかげ頂きたいと思ってますよ。そのために、今できる、今日一日今日一日しかできませんしね。

もう過去にも先にも行けませんから、今、自分がさして頂くべき、信心をさして頂いて、参ってくる氏子がおかげ頂けるように、いうことをまた、願わしてもらいます。自分の身の上、家族の身の上、氏子の身の上、修行生の身の上、弟子たちの身の上、全教の身の上、いろんなことがあっても皆それを神様にお継すがりして信心しておかげを蒙らせて頂けるよ
うな、私が。そんなおかげを蒙らせて頂いたら、そんな時には、神様から、

もう一つ徳を頂けるか、そしたらその徳はなにに使うか言うたら、氏子が助かるために、使わしてもらえるか。自分のことでは、もう十分おかげを頂いています。

まあまあ、もちろんここからも頂かんといかん。自分で、自分やらなあ、子どもたちやらねえ、孫たちやらってなってくるんかもしれませんけど。

何より、私が徳と力が持つとかんといかんのは、参ってくる氏子が助かるためですよ。だって神様はそれを助けるために、お前ここに座ってけっていうて、座らせているわけでしょ？ 私を。首根っこつかまえてね。で、私、お前こ座っとけと。お前助けたやないか、神が。誰のおか

げで助けてもらったと思ってんだ。はい神様です。はい、ここ座っどけ。
はい。もうそれだけですよ。要するにここはね。ありがとっございませす。
使って頂いて、ありがとっございませす。至らんもんでも。至らんに、至
るから使ってもらってるんじゃない。至らないのにそれでも使えるとこ
ろを使ってやろうと思って、置いて下さってるんですから。ありがとっ
ございませす。勿体ないことです。

至らんながらも、至らないなりにでも、アホはアホなりにでも、そ
れでも、求めて少しでも、神様にとって使い勝手がええように、何より
参ってくる氏子が天地金乃神様のお徳とお力を、受けておかげになっ
ていくように、そのために、このパイプが詰まらんようにね。神様と自分

とのパイプが詰まらんように。参ってくる氏子が天地金乃神様の大きなお徳、お力を蒙られるように。そのために、自分自身の御霊みたまが、曇らんようにさしてもらいたいな。

起こってくる事柄は、いろいろね、そろ曇りそうになることいっぱいあります。でもそれをまた日々の起きてくる事柄を、自分のたましいを磨くための磨みがき砂すなにしてね、それを磨いて磨いて、光りを放てるような、そういうおかげを蒙らしてもらわんといかんなと思います。

そういう心で皆、広前ひろまえの守りは、ともどもにね、おかげを蒙らせて頂いて、世間になんぼうも難儀な氏子ありって、取次とりつぎ助けてやってくれと、天地金乃神てんちかねのかみを助けてやってくれというふうにして、神様が願って下さっ

てるわけですからね。教祖様だって、その方、四十二歳の時にね、もう死んだんやから、ほんまやったら、そんな時神様にね、助けてもろうたんやから、神助けたんやから、あん時死んだと思うて欲を離して天地金乃神助けてくれやって、言われとんのですよ。「おまえもういっぺん死んだんやないか。あそこで」と。おんなじですよ私もね。もう何回か死んでますよ。そこを助けて頂いたんやから。もう天地金乃神様助けてくれと、てんちかねのかみ天地金乃神を助けてくれと。どんだけ使い物になるかわかりませんけど。そやけどまあ、自分でもう結構ですと言うのやなくて、もう神様がもう、「はい、ご苦労さん。結構やった。よう、ようやらせてもらった。結構やった」って、まあ死ぬ時にね、ご苦労さん言うて褒めてもらえるところほ

くらいまで、なんとか、この御道、御道のため、つまりは天地金乃神様てんちかねのかみが人を助けるための道をね、そのために、このいのちを使うて頂きたいなと、そのように思わせて頂いております。

本来その願いの元に、それぞれのお広前ひろまえ、金光大神広前こんこうだいじんひろまえがあつて、それぞれの広前ひろまえで金光大神取次者こんこうだいじんとりつぎしやを差し向けて下さつておりますから、どうぞそれぞれのお広前ひろまえで、お取次とりつぎを願つて、頂いて、お祈り添えを頂いて、どうか信心して、おかげを頂いて下さい。

でまた、残念ながら自分が通わせてもらうお広前ひろまえには誰も先生がおらん。もぬけのから。という方が居られたら、それでもま、こつやつて話を聞く機会があつたら聞かれて、それを心に掛けながら、ご信心なさつて

下さい。神様だけじゃなくって、きっとそんな時には、自分がお世話になった先生がきつと御霊こゝろいせい前にいらっしやるでしょうから、しっかりお縋すがりして下さい。うん。そしたら必ず足りるところは足して、おかげにして下さいますからね。はい。どうぞおかげ頂いて下さい。

今日は今日で神様から一日を頂いておりますんで、それぞれ神様ともにも、今日一日を過すごこさせて頂きたいなと思います。

よくお参りでした。

(了)



津田昇平教話 第三十話

令和三年一月三十日 朝の教話

令和六年十一月十五日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇一〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七一五
